

老舗名	木屋 B組 1班
Q.1	<p>①時代によって包丁に変化はありますか。</p> <p>②また、昔作った包丁は今もありますか。</p>
A.1	<p>①和包丁(日本の包丁)は、A:日本刀型包丁、B:江戸時代の貞享(じょうきょう)・元禄年間(1684~1702頃)、の式包丁型、c:現在の和包丁(江戸時代末期~)に大別される。洋包丁(幕末に西洋から伝わった包丁)も形的には大きな変化はありません。和包丁も洋包丁も大きな変化は金属の変化、すなわち炭素鋼製包丁がほとんどでしたが、ステンレス刃物鋼製や粉末合金鋼やセラミック製などが多くなっている。</p> <p>②包丁は生活の道具なので良い物ほどよく使われて小さくなったり朽ちて無くなるためにほとんど古い物は現存していない。奈良正倉院には聖武天皇ゆかりの包丁が何本もあり、これが古い包丁の代表です。</p>
Q.2	包丁を作る上で、開店当初から続けてきたこだわりはなんですか。
A.2	木屋が直接製造することはありませんが、鋼材の品質は一定以上の高品質なものを使用し腕の良い職人に限って作らせる事にこだわってきました。
Q.3	昔はどんなお客さんが多かったのですか。
A.3	木屋は創業以来昭和初期まで江戸(東京)の間屋でしたので、関東一円の小売業や小さい間屋が主なお客様でした。
Q.4	刃物はどれくらいの時間をかけてできるのですか。
A.4	和包丁と工場で機会により作られる洋包丁では違いがあります。高級和包丁(例えば重房)は一日一本、月に十数本、一人でそれほど手間暇かけて作ります。木屋の定番洋包丁は一度に1200丁ずつ製造し、完成までに100日以上かかります。
Q.5	日本で扱われている包丁の種類はいくつありますか。
A.5	和包丁:大別は16種類。中別は30種類。 洋包丁:大別は16種類。中別は20種類。
Q.6	1本の包丁をつくるのに何人くらいの職人さんが携わるのですか。
A.6	高級和包丁(例えば重房)は、全部1人。工場で機会で作る洋包丁は、数人~十数人。(ほとんどの工場は数人)。
Q.7	大量生産されている包丁と木屋の包丁の違いはなんですか。
A.7	工場で機械化により生産される洋包丁で言いますと… 木屋では最低でも中級品質以上の鋼材を使用。ほとんどの包丁は世界的にも最高レベルの鋼材が使われています。機械により生産されるとは言っても、木屋は熟練した技術者による製造工程が多く採用され、より高品質な包丁を作っています。ほとんど機械で製造し、職人の技術が反映されない廉価の包丁もあります。
Q.8	木屋の包丁はどれくらい長く使えるのですか。
A.8	鋼材の種類により一概には言えません。炭素鋼製よりステンレス刃物鋼の方が耐久性に優れ、長く使えます。(石田の例では)木屋オリジナルのステンレス刃物鋼製洋包丁を40年以上使用、今でも現役です。包丁の一番いたむ場所はハンドル部分ですが、一度も修理しないで使用しています。
Q.9	刃物を扱っているお店なのになぜ「木屋」という名前なのですか。
A.9	豊臣家の御用商人であった大阪の「林 九兵衛」は後に徳川家康公の招きに従い、林家の次男が別家して江戸に下りました。この時、姓の林を二つに割った「木」を用いて新しい屋号「木屋」とし、江戸本町に店を持ちました。これが本家「木屋」で、この本家から暖簾分けした別の木屋が数店出現しました。その中の一つが「刃物の木屋」です。

Q.10	時代によって扱う商品に違いはありますか
A.10	木屋では創業当初は主に大工道具を中心に扱い、昭和初期に家庭用刃物類を多く扱うようになり、現在は鍋類(アルミ・銅・鉄など)や木製品・竹製品・焼き物など幅広い商品も販売しています。